

三宅剛一

小論に与えられた課題は、「三宅剛一」（一八九五―一九八二）という、昭和初期から中後期にかけて我が国の学界で活躍した哲学者が、西洋哲学の伝統と取り組んだその過程を明らかにすることを通して、シンポジウムのテーマ「近代日本と西洋思想の受容」について可能な考察を試みることである。ただし小論では、紙幅の制約上、三宅剛一の生涯と哲学の全体を網羅することは断念し、大きく三つの時期に区分される三宅の哲学活動から各代表的著作を一点ずつ取り上げ、西洋哲学との関わり方を具体的に検証し、それが日本の近代哲学の発展のなかでどのような特徴と意義をもつか、を確認する作業に重点をおきたい。

酒井 潔

はじめに

——近代日本の哲学の展開

における三宅剛一の位置——

三宅剛一（みやけ・こういち）は、明治二十八年一月一日岡山県浅口郡鴨方町に生まれた。彼は、同じ岡山県出身の大西祝（岡山市）より三二歳、網島梁川（上房郡有漢町）より二三歳若い。

ここで三宅に至るまでの近代日本の哲学の発展を、管見にしたがい四つの時期に分け、そのなかで三宅が占める位置のその特徴と意義を予め測定しておこう。

まず第一期ともいべきは、philosophyを「哲学」と訳した西周を代表とし、実証主義や百科全書的な傾向の哲学思想が紹介された時期で、明治一〇年代までである。主にベンサム、ミル、スベンサー、モンテスキュー、ヴォルテールなどの抄訳やアンソ

ロジックが出版された。哲学は、ともすれば文明開化、富国強兵のための理論的道具として、あるいは経済思想として主に見られ、その研究自体にもまだアカデミックな性格は薄かった。²⁾

第二期は、明治二〇年代に入り、ドイツ哲学が本邦に伝えられ、今日われわれが哲学に要求するもの（人生論や世界観を含んだ真理の探究）が展開されるようになる。大西祝や網島梁川はこの第二期に属する。とくに大西の没後明治三六／三七（一九〇三／〇四）年に編集・出版された『西洋哲学史』（上・下）は、日本人として初めて、古代から近代までの西洋哲学を、自分の立場から批判的に解釈した。また大西は井上哲次郎と教育勅語をめぐって論争し、批評主義・理想主義・自由主義の姿勢を著した。³⁾大西や網島らにより、学としての哲学研究のための地盤が我が国にも創設されたのである。

第三期の代表的業績としては、西田幾多郎の『善の研究』（一九一〇・明四四）があげられる。ここで東洋の伝統（禅仏教）と西洋哲学との総合が真剣に試みられる。西田はさらに京都帝国大学在職中（一九一〇・明四三・一九三三・昭八）に三宅をはじめ多くの弟子を育てた。また西田は原典に依拠した西洋哲学の本格的な紹介にも功績があった、といわねばならない。

そして次の第四期こそ、三宅が、同じく岡山県（津山）出身で三歳上の出隆（一八九二・一九八〇）らとともに、ヨーロッパの哲学の動向を精確にふまえながら、今日日本の哲学界で広く行なわ

れている哲学研究の方法と理念を或る意味で確立した時期である。ここで後進の研究者達によって進むべき規範が示されたともいえるよう。一九二〇年代、大正から昭和初期にかけて、ヨーロッパでは一方で古典文献学の隆盛が見られ（主にイギリスとドイツ）、他方で新カント主義、現象学、解釈学等の潮流が生じていた（主にドイツ）。出はオクスフォードで文献学的古代哲学研究の分厚い伝統に接し、⁴⁾三宅はフライブルクで現象学の最先端を学び、⁵⁾それぞれ我が国のギリシア哲学研究、現象学研究の礎を築いた。

このように見ると、大西や網島によって用意された《学としての哲学》の研究地盤を、西田による深化・徹底を介して受け継ぎ、さらに発展させたいえで、哲学史の自立的・批判的解釈及び個別分野（数理哲学、現象学）におけるアカデミックな研究に貢献したのがまさに三宅の歴史的意義であるといえるのではないだろうか。三宅の不朽の労大作『学の形成と自然的世界』（一九四〇・昭一五）により大西の『西洋哲学史』はさらに超えられ、ここに基本と派生という濃淡のある、屈曲をもつ哲学史が現われたのである。

第一章 三宅剛一の生涯と業績

——その概観——

三宅が初めて哲学に立ち入って触れたのは、岡山市内にあった旧制第六高等学校在学中（一九二三・大二・一九一六・大五）のこと

である。当時ドイツ語教官であった立澤剛と高橋里美の薫陶により、三宅はとくにデイルタイとフツサルを知るようになる。そして、立澤に勧められて読んだ『善の研究』に感動した三宅は、京都帝国大学哲学科に進学して西田幾多郎に師事することになる（大五―八）。西田の下では、講義や講演を通して「直観と反省」をめぐる西田の思想的格闘に接し、また当時の現代哲学の諸問題（新カント派、現象学）に誘われ、同時に演習を通じてライプニッツやスピノザ等の西洋古典哲学の伝統にも親しんだ。卒業後まもなく新潟高校に赴任するが、この頃からリックカート等の新カント派と対決し、さらに大正一三年からは東北帝国大学理学部助教として「科学概論」を担当するなかで少しずつ自分の方向を模索してゆく。だが小論ではそうした歴史的経緯の詳細についてもすべて割愛せざるをえない。ただ、三宅六十年余の哲学活動のなかで公刊された著書のリストを次に示す…

- 1 『学の形成と自然的世界』（一九四〇：昭一五）
- 2 『数理哲学思想史』（一九四七）
- 3 『ハイデッガーの哲学』（一九五〇）
- 4 『十九世紀哲学史』（一九五一）
- 5 『人間存在論』（一九六六）
- 6 『現代における人間存在の問題』（一九六八、編著）
- 7 『道徳の哲学』（一九六九）
- 8 『芸術論の試み』（一九七三）

9 『時間論』（一九七六）

10 『哲学概論』（一九七六）

11 『経験的現実の哲学』（一九八〇）

以上の著作とその年代を概観したうえでわれわれは、三宅の哲学活動をいま大きく前期、中期、後期という三つの時期に区分できるように思われる（ただし、この三つの時期は、部分的には互いに重なったり、前後している所もあり、単に排除しあうものではない）。

まず前期の中心にあるものは現代哲学の研究である。特にフツサル及びハイデッガーと直接親交を結んだ一九三〇（昭五）年五月から翌年八月までのフライブルク留学が三宅自身に決定的なイムパクトを与えている。『ハイデッガーの哲学』の第一部「ハイデッガー哲学の立場」は、元は帰国後まもない一九三四（昭九）年二、三月に東北帝国大学の『文化』に連載されたもので、この前期の代表作といえる（ただし同書の第二部「近著に現われた哲学思想」は、*Holzwege* におけるハイデッガーの後期思想を叙述したもので、執筆は一九五〇年である）。

中期を代表するものは西洋哲学の歴史的研究である。すでにドイツから帰国後まもなく執筆に着手し、七年余の努力が結晶して一九四〇（昭一五）年出版された著書こそ『学の形成と自然的世界』である。『数理哲学思想史』（一九四七）は謂わばその続編で、数学論を含む各哲学の基本的モチーフを古代ギリシアからカン

トまで歴史的に解明したものである。同書は、三宅自身が二十年余り在職した東北帝国大学理学部時代の「記念」ともいえよう。

―後期は、とくに一九五四（昭二九）年京都大学文学部に転じて以降、前期と中期の仕事を踏まえたいうえて、「人間存在論」と称する独自の体系を三宅が構築してゆく時期である。それは、現象学の方法と西洋哲学の歴史的研究とが総合された、おそらく我が国最初の独創的研究であろう。その体系の宣言の書が、『人間存在論』である。以後堰を切ったように続編『道徳の哲学』、『芸術論の試み』が刊行されてゆく。

そこで、次章においては、いま提示された前期、中期、後期の各代表作に即しながら、三宅における西洋哲学の受容の実態と特徴を、具体的に分析し評価してみよう。

第二章 三宅の主著における西洋哲学の受容

第一節 『ハイデッガーの哲学』

同書の第一部「ハイデッガー哲学の立場」は一九三〇年五月から一年半近くフライブルクに留学し、フッサール邸の演習に出席し、助手オイゲン・フィンク⁽⁷⁾の私的授業を受け、これと並行してまた大学でハイデッガーの講義を聴き、オスカー・ベッカーから個人的に『存在と時間』⁽⁸⁾（一九二七）の解説を得た三宅が、帰国後二年もたたぬうちに「一種の熱を持って書き上げたもの」である。この論文はいわゆるハイデッガー哲学の紹介とも、またハイデッ

ガーについての大方のモノグラフィとも異なり、二つの大きな特徴をもつ。

その第一は、フッサールやハイデッガーやベッカーらと三宅が交わした対話の果実が豊富に見出だされることである。とくに当時のフッサールは、超越論的主観の存在身分という現象学の立場に関わる「現象学の最終問題」に、フィンクと共同で取り組んでいただけに、三宅が引いているいくつかの証言は、哲学的にも歴史的にも第一級の資料的価値をもつ。その第二は、フッサールやハイデッガーの一々の議論を精密に理解するというだけでなく、その哲学自体の掘って立つ立場の、その（隠された）前提を明らかにしようとする三宅の姿勢が一貫されていることである。この姿勢は三宅の中期や後期になっても変わらない。

この論文の内容を見ると、まず第一章「反省の歴史性と哲学の立場」で三宅は、哲学は反省を本質とし、反省は哲学すること自体にまで及ぶ、つまり哲学は自らの立場性に真摯でなければならず、自己の立場を絶対化すべきでない、と主張する。そしてフッサールの現象学では立場への反省が不十分で、この点への批判がハイデッガー哲学の動機になっていると言う。第二章「現象学的還元への自己還帰」では、現象学的還元そのものをエポケーすることは現象学では無意味であり、明証な現象につきまとう相対性や素朴性を振り切つて絶対を要求するのが理性であるが、このときフッサールのいう理性が既に歴史的に制約されているのではな

いか、と三宅は指摘する。第三章「ハイデッガー哲学における立場の問題」では、そういう哲学の立場という見地から三宅はまず「A. 時代の傾向」に言及する。そしてハイデッガーが当時のドイツの青年層の精神的傾向 (Jugendbewegung) に相通ずる要素をもつこと、また哲学的にはキルケゴールとニーチェに通じる問題意識 (近代の合理主義の文化や生活が実は本源的ではないのでは、という疑い) を持つと言う。「B. 哲学における前提と哲学のジツアチオン」では、ハイデッガーが真理性の標識を外的標準に求めず、解釈そのものの実存的 (existenziell) 性格に置くという点に三宅は注目する。存在論的解釈は、もともと現存在の存在的性格を基とし、これを存在論的可能性に企投するのである。かくして哲学の前提は、哲学の中で初めて現われてくるものではなく、現存在が常に前提し、生きてしまっているものの顕在化に過ぎぬ、と言われる。さらに「C. 実存の真理と有限的自由」では、哲学は或る確固とした立脚地をとらなければ、言い換えれば見方の一面性を知りつつ、自己の真実を生かすために、その立場に飛び込むということがなければ不可能である、と結論する。有限な真理を有限の実存として生かそうとすると、三宅はハイデッガー哲学の立場の特色を認め、これに強く同感してゆく。現実の人間として立ちうる立場の自覚のうえに哲学的分析を展開しようとするハイデッガーへのこのような評価は、また三宅自身の哲学観にもなってゆく。こうした哲学の立場そのものを問い

つめる姿勢は、例えば同時期に出た和辻哲郎の『風土』(一九三五・昭一〇)(とくに第一章「風土の基礎理論」) などにおけるハイデッガー理解の及ばぬところであろう。和辻には「志向性」とか「気分」などの概念への言及だけで、そうしたハイデッガーの概念がそもそも前提している立場、というものへの洞察は見られないのである。¹¹⁾

第二節 『学』の形成と自然的世界

この書は、その「序」冒頭に、「西洋の古典的哲学の歴史的研究である」と宣言されている。執筆の外的な動機は、一九三三(昭八)年の「岩波講座哲学」のためであったが、内的には先の論文「ハイデッガー哲学の立場」で出された「哲学の立場」への反省が一層徹底され、西洋哲学の立場全体を歴史の中に検証してゆくという作業に三宅を向かわせたのであろう。表題が「学」の形成と自然的世界」と称するのは、それが西洋の哲学史の中心問題だからである。部分と全体、あるいは有限と無限という本質的問題をめぐって世界というものが考えられ、学を形成するようになったのが西洋哲学史の特色である。三宅の場合、そのように無限への関係から世界を考えるようになった動機の一つは、数学についての哲学的考察(例えば集合論)であったし、¹²⁾ 数学的研究を基礎にもつ点も本書の強みである。

しかし歴史研究への沈潜はそもそも何のためであろうか。三宅は、過去の哲学の歴史的事実性を忠実に再現したうえで、「過去の

哲学者の認識を認識したい」と考えた。そしてそれは、異なる思想の伝統に出会うことによって自己の思想を錬磨し、真の反省を得るためであり、「自己に甘えた節制なき主観性に陥る危険から、われわれの哲学を護るため」でもある。フッサールも三宅宛の書簡のなかで、哲学史研究が「後追的思惟の受動性」に陥ってはならず、自己活動的な思惟が常に根底になければならぬ旨、助言していた。

ところで、同書の出版直後に出た下村寅太郎による書評には、「率直にいって我が国の哲学史研究は甚だ振わない」との書き出しで、実際に哲学史的伝統をほとんど持たなかった日本の学界の特質が批判されている。それだけに、流行の底に本質を把握し、西洋哲学を歴史性において理解した三宅の同書を、下村は「我が国哲学界の近來の事件である」と評価するのである。

同書の内容は以下の順に八つの章に分かれている。『プラトンの数学的宇宙論』、『イデアと教』、『ティマイオス』における宇宙論、『プラトン以後の哲学における無限の思想』、『十四世紀オッカム派の自然哲学』、『デカルトにおける延長』、『モナッドと世界(ライプニッツ)』、『カントにおける時間、空間、および世界』。各章とも精緻で徹底した考察が展開されているが、いまま第七章のライプニッツ解釈を取り上げ、その特徴及びライプニッツ研究史への貢献という観点から、二点に絞って述べる。

第一に、実在(実体モナド)の非連続という立場にたつライプ

ニッツが、生命体などの合成実体にも何らかのリアルな統一を認めるために最晩年に提示した「実体的紐帯」(vinculum substantiale)こそ、モナド論の急所だと三宅は見る。そしてこれは「事象そのものの要求」によって、ライプニッツの元々の形而上学的非連続観が「譲歩」または「緩和」せしめられたものであろうと言う。ボエムの歴史的説明やデイルマンの解釈も押さえたいので、三宅は自らのこの見解を「ライプニッツ哲学に対して、またその研究者に対して提出したい」と言明する。第二に、モナド論の思考枠は、多を一への分有の仕方に関係づけるプラトニズムの伝統に入るが、ライプニッツの思惟は最初から暗黙のうちに互いに独立な無限「多」のほうに偏向しており、だからこそ一と多の関係が主題となり、*exprimere*が出てくるのだと三宅は指摘する。この「表出」概念についても、マーンケやケーラーの史的考証もよく見たうえで三宅は、言葉を迎るだけでは駄目で、本質的な動機や思想連関をこそ問うべきだと注意している。

ともあれ、下村の評したように「十年の思索と読書が必要とするだけでなく、特別な教養と努力を要求した文字どおりの力作であり、大作である」本書に対し、京都帝国大学は一九四三(昭一〇)年二月文学博士の学位を授与した(審査委員…山内得立、田辺元、天野貞祐)。

第三節 『人間存在論』

本書の出版自体は一九六六(昭四一)年であるが、その構想は

「かなり前から」練られていた。例えば一九五五(昭三〇)年六月岡山大学で開催された関西哲学会では「人間存在の問題」と題して講演している⁽¹⁶⁾、京都大学文学部教授在任中(一九五四―五八)も、「人間存在論」と題する研究講義を連続して行なっていた。

また学習院大学(一九五八―六五)在職中の哲学概論講義の中でも「人間存在論」が扱われていた。本書は『十九世紀哲学史』以来久々に書き下ろした著書であり、自らの体系構築の宣言書である。この時期すなわち後期の三宅は、「歴史や社会から」考え始め、諸現象を統一的に理解する立場を、「人間存在の存在論的解明によって基礎付け、そこから体系的に、道徳、芸術、歴史、宗教の問題を解明しようと試みるのである」⁽¹⁷⁾。

まず本書の主題について、なぜ「人間存在」といえば、哲学では人間の存在そのもの、しかも現実の人生と呼ばれているものが全体的根本的に明らかにされねばならないからである。諸々の経験科学は抽象的側面についての認識しか与えない。さらになぜ「現実」といふと、われわれは経験なくして現実を知ることができないからである。方法については「現象学的方法」といわれるが、これは特定の方法を必ずしも意味せず、「開放的作業的方法」である。三宅は本書でも西洋哲学の分厚い伝統を受けとめたうえで、それぞれの哲学の主張がいかなる前提に基づき、いかなる限界をもつかを解明しようとする。

しかし何と言っても、本書の最大の特色は、哲学のみならず、

生物学、歴史学、社会学等の異なった分野に及ぶ膨大な量の読書が蓄積され、それらの多様な素材が三宅のいう「経験的現実」の視点から統一されていることである。三宅は生前「哲学は万学のアマチュアであることができる」点を喜びとしていた⁽¹⁸⁾。ただし、現代にあって自然科学や社会科学の知見と働きに無関心であるような哲学は、自己閉塞に陥るであろう。こうして三宅は、哲学と自然科学や社会科学とのインター・ディスプレイナリーな対話を、換言すれば異分野の学問成果との比較ないし比較思想を遂行するなかで、彼の『人間存在論』を展開するのである。いま同書第二章「歴史」を例にとつて三宅の議論の特徴を見よう…

「一 歴史の領域」…まず「歴史」といわれるものの領域が限界づけられねばならない(「自然」や「道徳」など他の諸領域も同様である)。歴史は道徳化も全体化もされはならず、また感覚的雑多でもない。その意味で三宅はトクヴィル、マルクス、あるいはウェーバーやリッカートを批判し、むしろ歴史家E・マイアーや社会学者G・ジムメルの方を評価する。しかし体験を基にするデイルタイともまた違って、結局、社会的作用をもつ行為の連関を歴史の領域だとするのである。

「二 行為と制度」…三宅はウェーバーのようなノミナリズム(個人的行為への還元)に反対して、アメリカの社会学者T・パーソンズのいう「制度」の概念に注目する。

「三 学説史的考察」…三宅の膨大な読書の蓄積が遺憾無く発揮

されている箇所。三宅は、自分の思想を明確にするのに役立つと思われる諸学説をとりあげ、それらを論評しながら考えてゆく。

例えば、デュエーイの「進歩」や「オプティミズム」といった形而上学的独断を批判し、この方面では、現実の分析に沈潜するディルタイの姿勢を評価する。

「四 歴史的作用連関の諸相」…諸因子と状況の一義的連関は同定できない。特定の史観はない。状況はいつでも特定の状況であり、その折々に相対的に制約されるだけである。歴史的作用連関は「果てしない行き掛りの過程」である。三宅は、人間の現実を鋭く透視して、社会革命が人間を根本的に変えるなどという期待も実現しがたいと結論する。

歴史を通じて人間性は変わらない！ この三宅特有のリアリズムないしペシミズムは、『人間存在論』では次の第三章「自己」の所で主題的に表現されている。その詳細についてはいまは省く他はないが、とにかく自己は既に事実性のなかに投げ入れられているという点が強調される。もちろんそこには「存在と時間」が意識されているが、三宅は同時にそのハイデッガーの存在論の中に、形式化されたキリスト教的概念が入りこんでいると見てもいる。そして三宅自身は、事実性による自己の規定という問題を彼なりに考えて、「土俗性」という概念を提示するのである。「われわれは、各自の少年期を、自ら選ぶことなしに、そうして

われわれのうちに深く浸みこんだものとしてもつ」²²。このとき三宅が、彼自身の少年期、自分の育った時代と社会の状況を回顧し、念頭においていることは間違いない。

こうしてわれわれは、三宅自身が生まれ、育ち、学んだ歴史的世界の岡山、精確に言えば明治後半期から大正前期にかけての岡山という問題性の前に連れ出される。そこで小論の最後に、近代岡山の精神的風土について、三宅哲学との関係、また近代日本における西洋思想の受容という観点から展望しておきたい。(そのような試みは、今回の岡山大会シンポジウムで「大西、綱島、三宅」が取り上げられたことの趣旨にも沿うであろう)。

おわりに

——三宅剛一の学風、岡山の精神的風土——

三宅の学風としては、方法的な面では、「学としての哲学」の理念の追究、西洋の原典の厳密な読解、そして論理の飛躍や主観的心情の混入への厳しいまでの禁欲などが挙げられる。しかし内容的な面をみると、三宅哲学そのものの拠って立つ立場として、そこに最初からリアリズム・ペシミズム・リゴリズムという傾向が見え隠れしていることもまた否定できない。そしてじつはこのような傾向こそ、三宅哲学と岡山を結ぶ接点でもある。

三宅の長男である三宅正樹教授によれば、四百年続いた生家が、実父の事業失敗のために少年三宅の目の前で没落したことが、世

俗的なもの一切への嫌悪感や死の意識を三宅に植え付けたという⁽²⁵⁾。そこからまた学問への敵しさも生まれたのであろう。徹底性や批判性は三宅六十年余の哲学研究に遺憾なく発揮された。師西田幾多郎も、「中々に人をうけがわれない三宅君」⁽²⁶⁾だからこそ、「三宅はどのように批評するか」を常に知りたがったという⁽²⁷⁾。しかし以上のことは、単に三宅個人の事情や性格にとどまらず、もう少し広く近代岡山の精神的風土にもつながっているように、私には思われる。

岡山県(備前+備中+美作)は、我が国でも、ずばぬけて多くの、それも第一級の哲学者、思想家、文学者等を輩出している⁽²⁸⁾。大西祝や綱島梁川の批評主義や徹底性などは、三宅やその他の岡山出身者にも多かれ少なかれ共通して見出だされるのではないか。それは、玄人好みの専門性とか鑑識眼の鋭さであり、その反面、頑固一徹、人好きの悪さ、融通の無さといった評もあるようだ。またリアリズムに関しては、「人生はそう大したものではない」という感覚を岡山出身の思想家や文学者は程度の差こそあれ持つとも言われている。逆に所謂理想主義、例えば白樺派のような方向等に対しては或る距離が見受けられる。三宅も六高在学中にロシア文学に親しみ、後にも同郷で自然主義の正宗白鳥を愛読した⁽²⁷⁾。それにしても岡山にこれだけの人材の輩出をみたのは何故か。われわれは安易な想定を差し控え、自然・歴史・文化・宗教・教育に関する以下の事実だけを挙げておこう⁽²⁸⁾。

1 山陽道等主要幹線に位置し、京都・大阪にも近い。三大河川と瀬戸内海。気候温暖で地形も穏やかで、自然災害が少ない。ために経済的にも豊かであった。

2 江戸後期の瀬戸内海、四国地域における寺社参詣の流行(情報の交換と蓄積)

3 江戸後期約百年間の備前備中美作三国における、寺子屋の設立総数一〇三一は全国第三位、私塾の数一四四は第一位。支配層の民衆教化重視、民衆の学習意欲の増大。

4 新興の宗教(金光教、黒住教)や宗教的ラディカリズム(日蓮宗不受不施派)の誕生。法然、栄西の出身地。明治初期におけるキリスト教の県下への迅速な伝播。

5 明治早期の学校設置の波(明治七年岡山中学、明治二八年時点では県立中学三校、私立中学四校)、女子教育の充実(明治四二年時点で高等女学校一七校は全国第一位)

本年二月逝去された司馬遼太郎氏によれば、日本有数の教育県・学者県である岡山は、その暗い政治史・軍事史のゆえ、また目立たぬ幕末・維新期の情勢のゆえに、ともすれば冴えわたらないイメージを被っている。しかし明治に入って学校制度がこの地でいち早く整備せられるや、官僚、軍人、政治家、文学者、芸術家、哲学者、宗教家を続々と輩出した。新興の宗教を二つも持ち、形而上学的ともいえる日蓮宗不受不施派を生むなど、岡山には独特なものがある。このような形で日本史への貢献ということが

言えるとするれば、三宅剛一を通して、あるいは大西や綱島等を通して、岡山が近代日本における西洋哲学の受容にはたした貢献も、確かなそれとして、決して忘れられてはならないであろう。

- (1) 「三宅」という姓は岡山県、とくに倉敷以西に多いといわれている。
- (2) 船山信一「日本の観念論者」、英宝社、一九五一年、第一章／高坂正顕「明治思想史」、高坂正顕著作集第七巻、理想社、一九七〇年参照。
- (3) 大西祝全集第六巻「思潮評論」、警醒社、一九〇四(明三七)年、五五、六〇頁他／平山洋「大西祝とその時代」日本図書センター、一九八九年、一七五—一八八頁参照。
- (4) 出陸著作集第七巻「出陸自伝」、勁草書房、一九七八年、三〇二頁以下参照。
- (5) 酒井深「岡山出身の哲学者三宅剛一の生涯と思想(一)——若き三宅におけるライプニッツと現象学を受容——」、山陽放送学術文化財団「リポート」第三五号、一九九一年、参照。
- (6) 酒井深「大正期第六高等学校の人文教育と哲学アカデミズムの形成」、両備糧園記念財団「学術、文化、芸術、教育活動に関する研究論叢」第七集、一九九四年、参照。
- (7) 大正一三年この「科学概論」担当教官として赴任(前任者は順に、田辺元、小山柄絵、高橋里美)、以来昭和二六年法文学部哲学科教授に配置替えになるまで二年間在任した。それによる関連文献や資料は、研究室か仙台空襲をうけ、大半が失われた。
- (8) R・ブルジーナ「現象学的形而上学への問い——オイゲン・フインク「第六デカルト的考察」にやせて——」(酒井深訳、『思想』第

八四一号、一九九四年七月)参照。

- (9) 『ハイデッカーの哲学』弘文堂、一九八八年、三三頁参照。
Vgl. Dorion Cairns, *Conversations with Husserl and Fink*, The Hague, 1976, p. 17ff.
- (10) Vgl. Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 12. Aufl. Tübingen, 1972, S. 312.
- (11) この視点から、いま戸坂潤の古典的な対和辻批判(和辻博士・風土・日本)、戸坂潤選集第五巻、伊藤書店、一九四八年)も改めて読み直せるかもしれない。
- (12) 三宅はこの時期に書いた長編論文「実数の領域と連続」(『哲学研究』一六三、一六五号、一九二九(昭四)年)を、西田に捧げた。集合論から、場所的な意味の「領域」を考えている。
- (13) 『学の形成と自然的世界』新版、みすず書房、一九七三年、細頁。
- (14) Vgl. Brief von Husserl an Miyake vom 19.4.1933. 閲覧を許可下さった三宅正樹教授に深甚の謝意を表した。
- (15) 下村寅太郎、書評「三宅剛一氏著『学の形成と自然的世界』」京都帝国大学新聞、昭和一六(一九四一)年一月二〇日号。
- (16) 岡山大学編『岡山大学二十年史』、一九六九年、一六四頁参照。
- (17) 『人間存在論』、勁草書房、一九八〇年(七刷)、「序」一頁参照。
- (18) 『経験的現実の哲学』、「あとがき」(三宅正樹)、弘文堂、一九八〇年、三三九頁参照。
- (19) 酒井深「三宅剛一の哲学——比較思想の観点から——」、『比較思想研究』第20号、一九九四年、一八九—一九〇頁参照。
Vgl. Heidegger, op.cit., §29, 31.
- (20) 『ハイデッカーの哲学』、八五頁以下参照。
- (21) 『人間存在論』、一六二頁。また『時間論』、岩波書店、一九七六年、三頁以下参照。

- (23) 『経験的現実の哲学』、三三九頁参照。
- (24) 西田幾多郎、下村寅太郎宛書簡、一九三八（昭一三）年八月二六日付、西田幾多郎全集第一九巻。
- (25) 下村寅太郎、書評「三宅剛一著『経験的現実の哲学』」、図書新聞、一九八〇年一〇月一日号。
- (26) その他の主な岡山出身者… 哲学…津田真道、近藤洋逸／思想…片山潜、山室軍平／文学…評論…森田思軒、正宗白鳥、薄田泣菫、坪田譲治、内田百閒、木下利玄、阿部知二／宗教…黒住宗忠、赤沢文治／絵画…竹久夢二、小野竹喬／物理学…生物学…仁科芳雄、川村多実二／政治…犬養毅、山川均
- (27) 『経験的現実の哲学』、三三九、三四二参照。
- (28) ひろたまさき、倉地克直編著『岡山県教育史』、思文閣出版、一九八八年、一九二頁以下、秋山和夫『岡山教育』第三版、日本文教出版、一九七九年、参照。
- (29) 司馬遼太郎『歴史を紀行する』、文春文庫、一九七六年、一五五—一七四頁参照。

(さかい・きよし、哲学史、学習院大学教授)